

## 『名人伝』を読んで考えたこと

弘前市立新和中学校

高橋香圭

対象作品／中島敦著『名人伝』筑摩書房

才能とは、どのようにして生まれるものなのでしょうか。『名人伝』を読んで私は才能と努力の違いについて考えることができました。

『名人伝』は天下第一の弓の名人を志す紀昌が師匠の元で厳しい修業を重ね、ようやく名人という称号を手にしたもの強くなりすぎたための疎外感、通り過ぎていく日常、紀昌が最終的に描いた「弓を射る」とはどんなことなのかを考えるお話です。私はこの話を読んで一度決めたことを貫き通す紀昌は、すごいと思いました。名人になるまで修業を続け、何年もの間諦めない姿は、とても出来ることではないので、紀昌は、ねばり強く、不屈の魂を持つてゐる努力家だと私は考えました。

「至<sup>し</sup>為<sup>い</sup>は急<sup>いそ</sup>ず無<sup>む</sup>く、至<sup>し</sup>言<sup>げん</sup>は言<sup>を</sup>去<sup>り</sup>、至<sup>し</sup>射<sup>しゃ</sup>は射<sup>る</sup>ことなし」という言葉は、私が一番印象に残つてゐる言葉です。この意味は「射る」という行為を追求していくと射る行為を越える段階に達する。言葉を追求すると言葉を越える段階に達し、弓

を極めれば弓を射ないという段階に達する。」です。この言葉から、紀昌は、たくさん努力を重ねてきたからこそ言えたことだと思いました。

私は、一つのことにつき一筋で取り組むことができず、肝じんな所で失敗をしてしまうと、心が折れて諦めてしまいます。でも、紀昌の懸命に努力をする姿を読み心を打たれました。私は一つのことにつき集中する時、どうしてもあきてしまう癖があるので、紀昌のように一つのことにつき集中して打ち込めるようになりたいと、心から思いました。

人は元々自分がそなえた才能をそれとは気付きません。その人にとってはあたり前のことだからです。例えるとすれば、鳥が空を飛べることを人々はうらやましいと思っているけれど鳥はそれを才能だと思いません。このように、人は自分にある才能をあたり前だと思いこみ、他人から見るとその人は才能があるように見えます。それは、紀昌も同じです。紀昌は、自分にとつてあたり前のように、一つのことに対しても熱

を注いで努力を怠りませんでした。私の目からすると、十分すごいことで、うらやましいです。紀昌は努力する才能があると思いました。

私は、『名人伝』を読んで、考えたことが一つあります。それは、人は誰しも才能を持っている、ということです。人には必ず一つは才能があると私は思います。人は人生で必ず妬み嫉みを経験します。人は自分にないものを他人に見つけ

ると、嫉妬を生みます。でも人と人を比べることで、それぞれの才能を見つけることもできます。才能は、無意識のうちに動作や口に出ていることがあります。才能とは、人によってたくさんあります。明るく笑わせられること、人の良い所をみつけられること、人に優しくできることなど、私たちにとつてあたり前のことでも才能です。私の才能とは何か……。じつくりと探していくこうと思います。